

教員時代におけるさまざまな学校づくりの試み その成功と挫折

—教職を目指す若者に夢を持って頂くために—

明治大学文学部 吉澤隆夫

はじめに

此度、明大教育会研究発表大会で表題の発表を行った。現在、教職を目指している若者に、教師としての専門職性を発揮するとはいかなることかを知って頂くためである。そこで、私の30数年間10校にわたる公立高校教師（私立1校を含む）としての奮闘の記録を集めた冊子を配布し、そのなかから、教頭時代の定時制改革と校長時代の学習塾や予備校に頼らない学校づくりの2例を中心として、実践報告と事例研究の場を提供させて頂いた。

私が考えている教師の専門職性とは、公務員として法と制度に従ってその実現を図りながらも、もう一方で、法や制度の本来の意味と趣旨を行政やマスコミの説明や解釈よりも深く洞察して、より本質的で意味のある教育実践を創意工夫し、場合によっては文科省や教育委員会などに提案・提言して行ける資質と能力を備えることである。私はこれを、教員生活上の一貫したスタンスとしてきたつもりである。以下に紹介し、ご批判を仰ぎたい。

Ki 高等学校における定時制の改革

当該高等学校には、2000（平成12）年4月から2002（平成14）年3月まで、定時制教頭として1年、全日制・定時制の総括教頭として1年の都合2年勤務した。

当時は学校改革の波が現場に押し寄せていた。定時制については、3年修業システムに改革するか⁽¹⁾、駄目なら廃校するかが迫られていた。しかし、定時制にすぎりつかねばならない生徒の窮状と教員たちのゆっくりしっかり学ばせたいとする心意気を知って、定時制の存続に全力を尽くす決意を固めた。最大の困難は、教育行政の求める学校外の学修と0時限や-1時限の授業を採り入れた3年修業制の導入を教員たちに認めさせることであつた。なぜならそれらは、生徒に学校軽視をもたらし、定時制教員から勤務上の特権慣行⁽²⁾を剥奪するものであり、彼らが強く抵抗していたからである。

教員の説得には約半年かかった。だが最後に教員たちは「教頭の提案、全部やります」と言って受入れてくれた。理由は、一方で教育行政の求めを受容しつつ、もう一方でそれを越え、彼ら教員が定時制生徒に本来してやりたいと考えていた、真に「教育」の名に値する教育実践を、総体として実現するものであつたからである。彼らは、始業30分前に出勤して授業終了と同時に帰宅することが許されていた勤務慣行を捨てるだけの価値を私の提案に見出してくれたのである。

具体的な内容は次のとおりである。この表は、「高等学校教育の現場から② 定時制が変わった」『季刊 明治 第37号』2008.1 に掲載したものである。

I 「総合的な学習の時間」の前倒し実施 （1単位）	
学習活動のテーマ：サーチ(search)	
学習分野（次から2分野を選んで学習する）	
①情報と生活を探る ②神奈川を知る ③映像から時代を考える ④環境と健康を読む	
II 6つの学校設定科目 （各2単位）	※注の(3)に内容
①鉄道と交通 ②時事問題と各国事情 ③金融から見た経済	
④人間を考える ⑤昭和史 ⑥自然の理解	
III 技能審査・大学検定試験(学校外の学修)による単位認定	
①技能審査の資格取得による単位認定	
日本漢字能力検定 2級	⇒国語 I 2単位
実用英語技能検定 1級・準1級⇒英語 I	4単位 2級 ⇒ 同 3単位
準2級	⇒ 同 2単位 3級 ⇒ 同 1単位
硬筆書写技能検定 2級	⇒書道 I 1単位
毛筆書写技能検定 2級	⇒ 同 1単位
②大学検定試験(現 高校卒業程度認定試験)の認定単位による単位認定	
最大	18単位 (採用科目・認定単位数 省略)
IV 3年修業制 （次の①～⑤の組合せで卒業に必要な74単位を修得することが可能）	
①1～3学年に履修した教科科目による単位修得	56単位
②3学年の選択科目2つ以上の履修	3単位
③学校設定科目3科目の履修	最大 6単位
④技能審査の成果による単位修得	最大 8単位
⑤大学検定意見による単位修得	最大 18単位
V 0時限の実施	
上記I・II・IVを実施するため、1時限の前にもう1時間の授業を設定して5時間授業とする (定時制は従来4時間授業⇒4年かかる)	

定時制の生徒には16歳から76歳まで、多様な人生経験の持ち主がいた。入学後、最初の夏季休業があけると1年生の半数近くが登校しなくなる。そこからまた、卒業時まで少しずつ欠けて行く。しかし、1～2年の途中休学という形をとる者も少なくない。妊娠・出産が最も多い。卒業式には幼子を抱いて卒業証書を受け取る女生徒が毎年数人はいる。

熱心に登校し、4年で卒業して行く生徒に占める割合が最も多いのは20代の家族持ちの中卒社会人である。学歴ゆえに辛酸を舐めてきた経験がそうさせていた。また中学校まで不登校だったが、煽られずにすむ環境ゆえに通学可能となった10代の若者たちもいた。

彼らの多くは、全日制の高等学校への入学をあきらめた経験を持つ。自尊感情は深く傷つき、親や周囲の人間が与えてくれる愛情にも飢えている。そして、学びを通じて自己を

高め、人格的に成長することをあきらめてしまっている。私と定時制教員とが行ったのは、行政施策を踏まえて3年間で卒業できる学びのシステムを構築する（イ）が、新しい学習指導要領の本旨（「ゆとり教育」の哲学）をもっと本質的かつ柔軟に構造化することによって行政の求めを越え（ロ）、定時制の生徒に学ぶ喜びと意味はもちろん、学びの方法をもわからせることのできるシステムとする（ハ）ことであった。次に、上に掲げた表を使ってこの構想を説明したい。

- （イ）にあたるのがIVの3年修業制であり、IVを実現するためにVの0時限・IIIの学校外の学修・IIの学校設定科目を設ける。2つの下線部は行政の求めであるが、学校設定科目を定時制に用いる発想は多分予定されていない。
- （ハ）の目的達成を目指してIの「総合的な学習」・IIを置く。IIIも、自ら学んだ経験の乏しい者が自らの努力でつかんだ成果を評価・賞賛してやるという意味を持たせ、積極的に取り入れる。学習指導要領言うところの課題解決力の育成が主眼である。
- Iの「総合学習」の前倒し実施については、定時制特有の意味がある。全日制では「総合学習」を否定する向きが強い。しかし定時制の生徒に対しては、「サーチ（search）」をの力を育てる問題解決学習や学びの協働というものがむしろ（ハ）の効果を上げるのに有効であり、「総合学習」はその活動の場として最適である。そのため、学習指導要領の許可規定を活用してまで前倒しし（正式実施2年前）、実施することに踏み切った。
- 学校設定科目の中には、「自然の理解」（蝶の生態研究）・「鉄道と交通」のような、学校外での実習的な学習活動の授業⁽³⁾が含まれている。これらがどのように柔軟な運用方法をとっているか、「自然の理解」（2単位、週2時間、年間70時間）を例にとって、授業運用の構想を説明したい。
 - イ 日常の授業と集中講座を組み合わせる。
 - ロ 「美術」の写生の時間のように、教室を離れ、学校外で行う授業を中心とする。
 - ハ 日常の授業については0時限に置く。そしてその0時限の長さを柔軟に考える。
 - ニ 学習活動の性格上、午前中から午後にかけて行う必要がある。したがって、何時から始めても0時限1時間分の授業として扱う。
 - ホ 集中講座については1回につき6時間の授業扱いとし、年間10回程度実施する。

ここには、定時制ならではの教育哲学とその顕現がある。また先に述べた、柔軟な学習指導要領の解釈（読み替え）がある。前者は、問題解決学習の徹底化によるその意味の具体化である。後者は、1単位時間（50分）の柔軟解釈とその運用に関する問題提起である。具体的には、0時限以前から授業を始めるとは、例えば13:00に学校近隣の野原に集合し、0時限の終わる17:20まで授業を行い、それをこの日の1時間の授業とみなす、ということである。朝9:00からでもよい。法律上、これは学校の決定権限内に属する。

私は、定時制の教員たちにこうした考え方の枠組みを提示した。科目内容などの具体的なところは彼らが考えて提案してくれた。それはとても建設的で希望溢れる作業であった。

勤務実態からすれば、定時制の教員たちは確かに不良教師と言えるかも知れなかった。しかし、彼らの仕事振りの背後には生徒を思う深い愛情と実態を踏まえた経験の重みがあった。意欲・学力の両面で、定時制の生徒にはじっくり、ゆっくり、少しずつ、確実に学ばせ導いて行くことが欠かせなかった。だから三年修業という在り方には反対する。それは彼らの信念であった。また、教員の中には教師としての能力や資質に優れている者が少なくなかった。気の荒い若者を、まるで飼い猫のようにおとなしくさせてしまう技は“テクニック”を超えた職人技であった。私の中には定時制教員と接して行くうちに、彼らを高く評価する気持ちが膨らんで行った。なかでも、彼らの教科指導力の基盤である学問的な見識と造詣の深さは見逃せなかった。上記の改革を遂行し、それを担って生徒を実際に指導していくことは、それなくして成し得ることではなかった。多分、日常的に部活動指導に全力投球して、専門分野の本格的な研究を怠っている全日制の教師には求めても無理である(4)。ある社会科の教員は、大手三大予備校の一つに講師として公募合格した(募集は1名のみ)。専門の研究分野に関する立派な論文を書いている者もいた。まるでカントのように、自らの研究に生涯をかけて取り組んでいる者もいた。それが、高等学校の「専門職」たる教師の本来、普遍的で基本的な姿でなければならないはずである。後にも述べるが、私は現在の高校教師に対する官制研修は、根本的に間違っているという信念を持っている。

I 高等学校におけるカリキュラム改革

当該高等学校には、2004(平成16)年4月から2006(平成18)年3月まで、校長として3年間勤務した。

当該校は、理数コースを持つ普通科の高校で、学区で2番手の位置を占め、「勉強のI高校」と呼ばれ(5)、週刊誌では「この10年で伸びた学校」として取り上げられていた。私は「いじめと喧嘩のない学校」と紹介していた。生徒は真面目でおとなしく、生活指導上の問題も皆無に近かった。教員も生徒を育てることに熱心であった。放課後はもちろん、土・日曜日にも多くの教師が生徒の求めに応じて補習指導にあたっていた。長期休業中も同様であった。

生徒に足りないところがあるとすれば、“良い子”すぎることであった。中学時代まで、器用に一定程度以上の成績を獲得できたため、揉まれ、傷つくことを知らず、本人たち自身、薄々それを自覚しているが乗り越える術を知らない。したがって、自分に向き合いトライさせ、自らの限界と可能性を掴ませ、葛藤を乗り越える精神を育てなければならない。

教員は5年程前から始まった学校改革の嵐に喘いでいた。ゆとり教育と2003年の「PISAショック」に対する反動以後の一連の行政施策は現場にとってあまりに性急すぎ、教員が生徒と接する時間を奪われ、教材研究を疎かにしなければならない状況を生んでいた。しかも人事考課という制度が、本音を言えない状況と教育活動の空洞化(パフォーマンスに終わる)を生じかねない状況をもたらしていた(6)。

こうした前提の下、私は次のような当該校の教育課程改革を行った。以下の紹介資料は2006(平成18)年度末に、学区内中学校長・高等学校長会議で配布したものである。

平成19年度に向けて

1 学校の特徴

(1)～(4)

省 略

2 方 針

- (1) 確かな学力保証を通じた確かな進学保証
- (2) 高等教育に耐え得る素養・資質の形成 = 大学進学後の研究力の基礎形成
- (3) 予備校や学習塾に頼らなくてもよい指導の充実
- (4) 専門コース教育の再興

3 具 体 化

(1) カリキュラムの再編成

- ① センターテスト5教科7科目時代への十分な対応 (例) 英語必修22単位
- ② 専門コース教育の「専門化」 (例) 「～探求」「～研究」などの名称科目の新設, 実習科目の復活

(2) 95分授業2コマを含む45分7時間制への切换え

※95分授業: 45分授業を, 5分の途中休憩時間なしに2時間通して行う。

(3) 2学期制の不採用 = 3学期制の維持による夏季休暇の日数削減等による年間14日の不足授業日確保

(4) 専門コースへの少人数指導の導入 (20人編成2クラス)

- ① 数学5科目19単位 (含, 「理数数学」) ② 英語4科目16単位
- ③ 理科2科目 (物理・化学) 6単位

(5) 全教科にわたる授業改善研究の推進: 本校生に必要な学力とその育成の再確認

- ① 生徒による授業評価の実施と活用
- ② 予習を前提とする授業方法の工夫とそのための教材開発
- ③ 全教科で研究授業と研修会を実施 (「授業改善週間」として)
- ④ 外部者の参加 - 学校評議員, 連携大学 (明治大学) の教授・学生

(6) 土曜日, 長期休業中における補習講習体制の充実

- ① 目 的: 到達度に基づく評価導入の本旨の実現 = 学力底上げによる成績の正規分布解消
- ② 具体化: 夏季休業全期間にわたって各日50分6時間の計画実施

課業中土・日曜日の補習をサークル活動として開講

(7) 近隣大学との連携 (本校の選択科目としてカリキュラムに位置づけ, 単位を認定)

- ① 内 容: 明治大学理工学部・農学部教授による高校生向け講座15回の受講
- ② 実 績: 受講者数…平16度 約35名 平17度 約65名 平18度 約60名
 単位取得数…平17度 14名 平18度 11名

(8) 大学の教員養成・授業研究への協力 ⇄ 高校の授業改善への協力

省 略

※上表は, 部分修正を含む。

全体の柱は次の2つに集約される。

- ①予備校や学習塾に頼らないで済むだけの必修科目の充実と増加単位化を図り、あわせて応用領域学習科目（「～研究」）の設置と少人数指導を導入する。そのために1日7時間制の時間割とし、授業充実のために95分授業を採用する。
- ②生徒にトライする精神を育てるために予習学習に重点を置き、それを支える体制を授業改善研修と補習体制整備（補習の準カリキュラム化）によって構築する。

以上に関して、3点、触れておきたい。

まず、補習の準カリキュラム化について。長期休業中の補習は、一日に50分6時間の時間割をつくって割り振る形をとった。多い日は10科目以上におよび、少ない日でも5科目が並んだ。土・日曜日も同様であった。平常授業期間中の土・日曜日の補習指導は「部活動指導届」（同好会も可）の提出対象とした。教師の善意に応えるべく、サークル活動という体裁を装って部活動指導手当か代休措置を請求できるようにしたのである。ここには私の一つの価値観があった。それは、運動部活動が尊重されている割には学校本来の勉強の面倒見や文化活動が軽視されていることである。これに私はずっと憤りを感じていた。

次に、授業改善研修について。上記の学校改革の嵐は教員集団を疲弊させつつあった。行政上や理論上の意味は分かるが、管理・経営上ないしは単なるテクニックの改革は本質的な意味での「教育」に意味と効果をもたらすものではなく、現実には、教師には徒労しかもたらさなかった。また、教育活動を市場経済の土俵に上げてしまう学校の経営組織化政策によって、教員は生徒のサーバントかウェイターに貶められて意気消沈しつつあった。しかし校長は、こうした動向を門前払いすることはできない。そこで、当該校の学校改革の一環として、教員が自発的・主体的に取り組める授業改善に一点集中させ、モチベーションの高揚を図り、自分たちの目指す方向と改革の波の一つひとつとを徐々に比較検討させ、理解した上で取捨選択させる道を選んだ。それが授業改善研修である。私の退職以降、この研修には毎年、明治大学教職課程の学生を参加させて頂いている。

最後に、明治大学理工学部・農学部（生田キャンパス）との連携について。この事業は、明治大学生田キャンパスの社会貢献事業の一つとして企画され、私の当該校着任年度より開始された。翌年、私はこれを当該校の選択科目（1単位）として教育課程に採用させて頂くことを申し出で承諾を得た。理由は次のとおりである。

- ①高等学校の教員の知識では指導できない内容が豊富、
- ②教科書には掲載されていない最新の自然科学の知識や情報に接することができる、
- ③理系学習で得られる理論的知識が、技術開発されて生活の中に実用化されていく過程と実際がわかる、
- ④上記を通じて理系の学問や自然科学研究の意味と有用性と興味深さを実感できる、
- ⑤それは、場合によっては生徒に今後自分が目指すべき指針となる、
- ⑥以上から、高等学校のカリキュラムを超高等学校級のものに格上げ出来る、
- ⑦生徒の学力向上のみならず教員の指導力向上にもつながる。

理系離れが問題になっている状況がある。最大の理由は、学校でできる実験・観察等が生徒に魅力を感じさせるほどのものにはなり得ない環境の貧弱さと、教科書に掲載される内容は既に10年前の、自然科学としては陳腐になりかけているものであって、自然科学のフロンティア性やベンチャー性が実感されないところにある。また、現在までの高大連携の大半は、高校・大学のどちらか一方が「やめる」と言えば終わってしまう不安定な仕組みであって、本格的に高校生に推奨できるものにはなり得ていない。そうした意味から、私は選択科目化をお願いし、カリキュラムとして高大が連結することを企図した。どれだけの生徒が受講し単位を取得したかは上表の(7)－②をご覧頂きたい。現在では、人数はわからないが、延べ数にすると毎年900名前後が受講しているという。最後に、現在の当該講座の内容を紹介しておく。明大理工学部の荒川利治学部長教授・中村幸男教授よりご提供頂いた資料から作成したものである。

回	2012年度	2013年度
1	光が拓く生命科学	意識あるロボットについて
2	混成文化都市としてのパリ	これからの医療に貢献する化学 －ものづくりによるアプローチ
3	波と通信	地震の揺れから身を守る
4	純粋数学の素敵な世界・整数を素材として	学校数学と現代数学との刺激的な関係
5	電気をためる！ 超電導の電力応用	ロボットにおけるメカニズムと発想
6	ウェブ技術 :美しく使いやすいウェブページ	パリの顔
7	機械や構造物の健康診断	バイオインフォマティクス入門
8	動きをデザインする技術：制御工学の基礎	第二外国語学習の醍醐味 :ドイツ語を例に
9	東日本大震災が投げかける問い	土壌の科学と人類への貢献
10	次世代のエネルギー、光触媒！	メディアとしての建築 －建設の読み方・楽しみ方－
11	植物と動物の寄生線虫	結晶表面の原子の並びを調べる
12	食品の性質を化学的に考える	植物と微生物：敵それとも味方？
13	PCR法の発見と展開	日本のTPP参加交渉を巡る政治と経済
14	食品自給率で読み解く日本の食と農	くらしの中のデジタル信号通信
15	生命倫理 － 尊厳とは何か	野菜の品目と分類、栽培技術

近年、学校は教育行政政策の受け入れ機関に化しつつある。それが国民文化の伝達を図る学校の役割だというなら、私が言いたいのは、学校は教師が「文化を伝える」のではなく、「文化を創り出す」文化を示し、伝える機関でなければならないということであり、教

師たるもの、そうした専門職になろうとする気概と責任の自覚を持ってほしいということである。

おわりに

研究発表大会で配布した冊子には、これまで紹介した事例以外に Ko 高校における全期間同一場所に連泊する修学旅行、M 高校における教育相談の導入とガイダンスルーム設置提案、Ka・S 高校における韓国修学旅行、同じく S 高校における ISO14001 と麻布大学との連携による環境教育・ボウリング場との提携による体育授業、その他を紹介している。また、私の教科指導力向上の軌跡、30 代前半で生徒指導主任を務めた経験、文部省（当時）の学習指導要領に携わり社会科の廃止と「地歴」「公民」の成立に直面した経験などについても紹介している。研究発表大会ではその中から数点を選いいで付け加え、上記の Ki 高校・I 高校での試みに加えて私の願いをより鮮明にさせて頂いた。この稿をお読み頂いている方には、同研究発表大会で配布した冊子を是非ともお読み頂ければ幸いである。教職を目指している学生諸君には、教師のライフヒストリーとキャリアステージの一例として、勉強にもなると思う。（冊子では学校数が多いので、最初の勤務校を A 高校として、アルファベット順に並べてあり、本稿では各校の頭文字を使った）

蛇足のようになるが、冊子の中で紹介している Ko 高等学校における修学旅行について紹介することをお許し頂きたい。この修学旅行は 4 泊 5 日にわたって、同一場所の同一宿舎に連泊して自分たちの設けた研究テーマを調査・研究させるという、「修学」の名に値する旅行を目指すものである。基本的な手順は、入学した時点から、①旅行先選びと確定（3 か所前後、地方は全生徒を 4 泊受容できる宿泊所なし）、②旅行地の個人研究とレポート作成、③それに基づく旅行地に関する研究テーマの設定と個人研究・レポート作成、④同一テーマに基づく研究調査班の構成（クラスを越えてテーマで）と課題の絞り込み、⑤班の研究テーマの確定と生徒の手による訪問先へのアポイントメント手続き、といった手順で 2 年時秋の修学旅行実施まで進めて行く。その間、当然、教師の指導が随所で行く。旅行終了後は班単位のレポート提出と場合によっては報告会開催があり、各班のレポートは学校図書館で所蔵する。

私が当該校に勤務し始めたのは 1983（昭和 58）年であった。この修学旅行は既に先輩教師の手で始められていた。私はそれをより徹底化する役割を担ったに過ぎない。それをなぜ紹介するかといえば、これは「総合的な学習の時間」の先取りにあたるものであると考えているからである。この修学旅行は、教師が自由な感性を保つことができ、生徒を育て生徒と共に育つことに喜びを感じ、仕事に余裕を持っていなければならない。逆にいえば、そういう条件を整えば、こんなことがいくらかでも編み出せる。その証として示したかったのである。わざわざ学習指導要領に設けて授業として行う必要など必要ない⁽⁷⁾。近年、当時のような雰囲気と状況が失われ、新しく採用されてくる若い教師がみずみずしい感性と伸びやかな知性を失わされている。型通りの職務遂行のなかでしか追究力を発揮できず、型を破って超え出る発想をすることが出来なくなっている。先に述べた「文化を創造する

文化」の伝承者である教師がその術を知らないままに置かれている。官制の研修が増え、充実すればするほど逆効果が生じる恐れさえ感じられる。技術やテクニックを習得して創造力は形成されるものではない。むしろ教師は準研究職として自己研鑽に努められるようにするべきではないのか。この疑問は、ずっと私のストレスとなっている。

今、私たちが取り戻すべきものがこの修学旅行の発想にはある。私たち教師は、こういう力を取り戻さなければならない。それは私の教員時代以来の信念である。

私は、明大教育会が私の考える、本来の専門職を育て、我々自身もそういう姿勢を維持し合う協働の場であってほしいと願っている。そういう思いと願いを籠めて今回の研究発表の任を果たさせて頂いた。

今度は本当にしめくくりとして、私の教員生活の最後に待っていたことを配布した冊子から抜粋して紹介し、学校の教師という仕事の素晴らしさをお伝えしてこの稿を終わらせて頂く。

それは私が定年退職した年のことでした。B 高等学校の最初の教え子たちが 50 歳を迎えたというので開いた同窓会に招かれたときのことです。4 クラスしかなかった学年でしたが約 50 名の参加者がありました。そのなかの 6～7 人が、いつしか私を取り囲んでいました。何が始まるのだろうとっていると、かれらの口から意外な言葉が飛び出てきました。「私が今の仕事に就いたのは、先生の授業がきっかけです」「先生の授業（ご指導？）を受けたことで、私の人生が決まりました。」この瞬間に、私の 30 数年間の教員生活の嫌なこと全てが吹き飛びました。教師冥利に尽きる。教師をやっていてよかった。思い残すことはない。自然とそんな感情が湧き起こったのを今でも覚えています。

本日の私の発表は、そこまでに至る私の拙くささやかな頑張りの足跡です。(8)

- (1) もともと勤労青年の学びの場であった定時制の始業は 17:30 であり、授業が一日 4 時間しかないため、3 年では高等学校の卒業要件を満たせなかった。これを解消して 3 年で卒業させるため、① 学校外部での学習成果（大検合格科目単位や検定資格取得等級）を高校卒業単位に組み込む「学校外の学修」、② 1 時限の前に 0 時限・マイナス 1 時限等を設けて実質全日制同様の 6 時間授業にする、などの措置が求められていた。
- (2) 定時制職員の勤務は、本来 13:30 から 21:30 までであったが、戦後間もない頃から、実際には始業 30 分前の 17:00 頃からの出勤が慣行化しており、実働は 4 時間程度であった。
- (3) 「6 つの学校設定科目」は次のとおり ※中学校向け配布資料より

①鉄道と交通

(全学年共通履修)

- ・生活を支える鉄道の現在、未来社会に向かったの可能性
- ・鉄道博物館など、関連施設での実習、調査

・鉄道旅行の計画からその実施まで	
②自然の理解	(全学年共通履修)
<p>一年を通じて、蝶の生態観察を中心に授業を進めます。</p> <p>2単位の科目ですが、1単位分は時間割の0時限に週1回設定されており、教室・学校敷地内・学校周辺の野原や講演で授業を行い、もう1単位分は年間8回程度、山梨県や神奈川県内の三浦半島、東丹沢、茅ヶ崎市などに出かけ、集中講座として授業を行います。</p> <p>超といっても、成虫ばかりでなく、卵から幼虫・蛹まで全てを含みます。また、蝶への興味を深めることはもちろん、蝶を通じて自然というものへの理解を深め、自然の科学的な調査・研究方法を学ぶと同時に、人間生活の在り方と自然との関わりについての考察を深めることも、この授業の目的です。以下に、年間計画の中から、主な項目をあげてみます。</p> <p>種別判別法の実習 幼虫・成虫の飼育と観察記録 バタフライガーデン（生息地）づくり</p> <p>蝶の吸蜜植物調査 幼虫の植樹・食草調査 越冬方法と適応戦略</p> <p>個体変異（地理的変異、季節型）と遺伝 保護色と擬態 蝶の分布拡大戦略</p> <p>自然保護の実態と成功例 開発と自然破壊の現状</p>	
③金融から見た経済	(全学年共通履修)
<ul style="list-style-type: none"> ・資産・経済活動の学習を通じて価値の豊かさの理解を深化 ・統計グラフの作成などを通じた実際経済の問題解決能力の涵養 ・定時制生徒の勤労体験を生かした会社経営や商取引の学習 	
④人間を考える	(4年次履修)
<ul style="list-style-type: none"> ・人間幼児期から青年・成人に至る各段階の心の発達とその理論 ・モラトリアムやいじめなどの今日的課題と心のメカニズム ・保育園などの施設見学，成育歴を振り返ることによる自己理解 	
⑤昭和史	(4年次履修)
<ul style="list-style-type: none"> ・20世紀全体を視野に置いた，現在に直結する昭和期全体の検証 ・生活主体としての民衆を，グローバルな背景と重ねて理解 ・国際化の時代に相応しい歴史的思考力と開かれた態度の涵養 	
⑥時事問題と各国事情	(4年次履修)
<ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事・テレビの報道番組と関連各国の歴史的・社会的背景 ・ビデオテープの編集とそれに関する発表・討論を目指して ・国際理解の深化と情報の収集・処理，メディア活用方法の習得 	

(4) ここが現在の高等学校教育の最大の問題だと私は捉えている。文科省や教育委員会の言う「教師としての専門性」は学習指導や生徒指導のテクニックにすぎず、その追求にのみ傾けば傾くほど、じつはこの面において教師を益々「素人」にして行く。教員採用試験が中学校採用と高等学校採用を一つにしてしまっていることも高校教師については同様である。学習指導も生徒指導も、底辺をなす専門的知識の薄いままでは、採用時の即戦力などいづれ色褪せてしまう。実際、現職校長からは「最近の

新任は“行け行けどんどん”ばかりで教育が軽薄になって困る」との声が上がっている。

- (5) 学区1番手の学校は「学校行事の〇〇高校」と呼ばれていた。在学中に目一杯青春を謳歌し、浪人しても後悔せずに自らの希望の大学を目指すガッツがあるという意味である。I高校の生徒に星井のはこのガッツであった。
- (6) 校長も教育委員会による人事考課の対象である。そこではパフォーマンスは欠かせない。そのため、校長が変わる度に前任校長の努力は継承されずに忘却されて行く。同じことを繰り返しては校長自身が評価されないからである。学校と教員は、校長が手柄をあげようとするための手立てや方策に翻弄され、生徒もそのとぼっちりを受ける。学校は自動車のモデルチェンジのように目まぐるしく教育方針と教育計画を変えていく。そのため、定着するものが何もなくなる。その連続がここ10年以上続いている。本来、手段であったものが目的それ自体に替わってしまっている。その意味では、経営手法に基づく学校改革や学校組織の経営組織化は過渡期の産物と捉え直されるべきである。これが生み出した諸政策に整理が加えられ、学校にはもっと落ち着いてじっくり時間をかけて醸成する雰囲気に戻ってこなければならぬ。それが私の認識である。
- (7) 「総合的な学習の時間」と観点別評価がどれほど形骸化しているかの調査結果を冊子のなかで紹介しておいた。是非とも実態をご覧いただき、考えてみて頂きたい。
- (8) 『教員時代におけるさまざまな学校づくりの試み その成功と挫折 ―教職を目指す若者に夢を持って頂くために―』(2013年11月16日 明治大学教育会第6回研究大会 第3分科会 配布資料) 吉澤隆夫 63頁。